



書評 : フレドリック・ジェイムソン『資本論を表象する : 第一巻の読解』、『アメリカン・ユートピア : 二重権力と国民皆兵』

渋谷, 謙次郎

---

(Citation)

神戸法學雑誌, 67(1):85-120

(Issue Date)

2017-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009957>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009957>



神戸法学雑誌第六十七巻第一号二〇一七年六月

書評：フレドリック・ジェイムソン  
『資本論を表象する：第一巻の読解』、  
『アメリカン・ユートピア：二重権力と国民皆兵』

渋谷 謙次郎

1. フレドリック・ジェイムソンは、米国のマルクス主義文学・美学理論家である。<sup>(1)</sup> 一部の人文系の読者の間では、ジェイムソンは、かつてのジャン＝フ

- 
- (1) ジェイムソンは1934年生まれ。デューク大学特任教授。主著は以下の通り（本稿でとりあげる著書については注9および10を参照）。邦訳も多数あるが、本文でジェイムソンの著作に言及する場合に、必要に応じて邦訳の出典についても後続の注で併記した。*Sartre: The Origins of a Style*. New Haven (Yale University Press, 1961); *Marxism and Form: Twentieth Century Dialectical Theories of Literature* (Princeton University Press, 1971); *The Prison-House of Language: A Critical Account of Structuralism and Russian Formalism* (Princeton University Press, 1972); *Fables of Aggression: Wyndham Lewis, the Modernist as Fascist* (University of California Press, 1979); *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act* (Cornell University Press, 1981); *Late Marxism: Adorno, or, The Persistence of the Dialectic* (Verso, 1990); *Signatures of the Visible* (Routledge, 1990); *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism* (Duke University Press, 1991); *The Geopolitical Aesthetic: Cinema and Space in the World System* (Indiana University Press, 1992); *The Seeds of Time* (Columbia University Press, 1994); *Brecht and Method* (Verso, 1998); *The Cultural Turn: Selected Writings on the Postmodern, 1983-1998* (Verso,

ランソワ・リオタールなどと並んで「ポストモダン」云々の批評家として記憶されているかもしれない。当初、建築の分野で用いられた「ポストモダニズム」は、「ポストモダン」、「ポストモダニティ」として先進国を中心とする文化や知の状況を表すキーワードに転化した。そのことを集約的に議論したリオタールは、元々トロツキズムから派生した「社会主義か野蛮か」の一員であったが、1968年のフランス五月革命後はマルクス主義自体に懐疑的になり、その結果が彼の『ポストモダンの条件』（1979年）であった。そこでは社会主義などの「大きな物語」あるいは「メタ物語」への不信感が「ポストモダン」の特徴だとされた（「ポストモダン＝大きな物語の終焉」というクリシェのきっかけとなった<sup>(2)</sup>）。他方、ジェイムソンは、そうした時代状況をシニカルに肯定していたわけではなく、商品フェティシズムの行き着いた後期資本主義社会<sup>(3)</sup>におけるイデオロギー的、文化的諸現象に、いわば歴史感覚なき歴史段階としての「ポストモダン」という括りを与え、モダニズムの極北としてのマルクス主義的な分析を加えていた論者であり、ジェイムソン自身は、今日に至るまで一度もマルクス主義者であることをやめてしまったことはない<sup>(4)</sup>。ただし、ジェイムソン

---

1998); *A Singular Modernity: Essay on the Ontology of the Present* (Verso. 2002); *Archaeologies of the Future: The Desire Called Utopia and Other Science Fictions* (Verso. 2005); *The Modernist Papers* (Verso. 2007); *Valences of the Dialectic* (Verso. 2009); *The Antinomies of Realism* (Verso. 2013.); *The Ancients and the Postmoderns: On the Historicity of Forms* (Verso. 2015).

- (2) ジャン＝フランソワ・リオタール（小林康夫訳）『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』（水声社、1984年）8-9頁。
- (3) 後期資本主義 *late capitalism* という用法は、様々な論者が様々な意味合いを込めて使用してきたが、ジェイムソンに直接影響を与えたのが、エルネスト・マンデルの以下の著作である。Ernest Mandel, *Late Capitalism* (London: Humanities Press, 1975). マンデルのいう後期資本主義とは、ポスト帝国主義・独占資本段階としての多国籍資本、大衆消費社会、グローバル市場の成立などで特徴づけられる。
- (4) Fredric Jameson, *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism* (Duke University Press, 1991).

ンは、その「カルチュラル・ターン」という著作名で知られるように、伝統的なマルクス主義の土台・下部構造重視と異なって、ルカーチやブロッホ、アドルノといった西欧マルクス主義の系譜の影響下で、「文化」の領域重視に向かったため、いわゆる文化（文化批評）左翼に位置づけられることもあり得たであろう（ジェイムソンと同世代でいうと英国のスチュアート・ホルのよう<sup>(5)</sup>に）。しかし近時、ジェイムソンが『アメリカン・ユートピア』で提唱している大胆な政治的プログラムをみればわかるように、いわゆる文化左翼と異なって、彼は、ユートピアが消失した「ポストモダン」におけるユートピア論の復権と（社会民主主義ではない）社会主義について公然と語ってきた真正のマルクス主義者である。

ジェイムソンの多岐にわたる著作群は、古代ギリシアから現代にいたるまでの哲学史はもとより、文学史、建築史、歌劇、映画、とりわけモダニズムの潮流についての理解を欠くと、ほとんど読解不能になることがある（彼のポストモダン批評は常に文芸におけるモダニズムの諸様式の追想と表裏一体になっている）。その文体は入り組んでいて、英語圏では最も難しいものの書き方をする一人であり、隠喩が多用され、独自のジャーゴンが創設され（「政治的無意識」 political unconscious、「比喩形象」 figuration、「メタコメンタリー」 metacommentary 等々）、通常マルクス主義の教説に慣れている人からみても、ジェイムソンの書くことは過度に秘儀的、密教的で、しばしば煙に巻かれたような気分になるのも致し方ない。そのことについては、ひょっとする<sup>(6)</sup>

(5) Fredric Jameson, *The Cultural Turn* (Verso, 1998). フレドリック・ジェイムソン（合庭惇ほか訳）『カルチュラル・ターン』（作品社、2006年）

(6) 久野収と鶴見俊輔は、明治憲法下での天皇＝現人神のような神権説を「顕教」と呼び、尋常小学校や軍レベルで、たてまえとして徹底的に教え込まれ、他方、立憲君主制的な天皇機関説が帝国大学や官僚レベルでの「密教」として了解されていたという二重性を指摘している（『現代日本の思想』岩波書店、1956年）。この「顕教」、「密教」の二重性（通俗的なものと高等的なものとの二重性）は、まさにマルクス主義にあてはまり、「顕教」的な部分は、旧社会主義国での学校教育はもとより、一般的に「チャート式」に理解されている限りでのマルク

とジェイムソン自身が無自覚というよりは意識的で、彼が通じているロシア・フォルマリズムの「異化」作用——ヴィクトル・シクロフスキーが提唱したような、自明さを拒絶して対象を奇妙なものにする言説作用——の影響とも考えられる<sup>(7)</sup>（ちょうどマルクスが「商品の物神的性質とその秘密」において、ありふれたテーブルのような商品を「その脚で床に立つだけでなく、他のすべての商品に対して頭で立つ」という具合に、商品を存在論的に「異化」してしまったように）。イギリスの文学理論家テリー・イーグルトンは、「私は文学理論の本からも詩や小説に劣らぬ深い喜びを得ることが多いのだが、そんなときにきまって本棚から取り出すのがジェイムソンの本であることを、告白しなければならない」と賛辞を述べている一方、「なにしろ彼のエクリチュール（書くこと、書く行為）のもっとも目につく特徴たるや、知人の誰かが奇抜で人目を引く服装をしているのを目にしたときのように、黙ったまま相手を傷つけぬよう

---

ス主義（歴史とは階級闘争、土台と上部構造、史的唯物論、生産力と生産関係の矛盾、階級支配の道具としての国家、等々）に反映されている。マルクス主義の陳腐さを批判したければ、通常、これらを問題視すればよかった。他方、ルカーチ等に端を発し、物象化論に代表されるような、西欧マルクス主義に継承されてきた「密教」的な流れは、ジェイムソンがかつて『マルクス主義と形式』（原著1971年、邦訳『弁証法的批評の冒険』晶文社、1980年）で英語圏に知らしめた。ジェイムソンは、こうした「密教的」なマルクス主義の流れに、さらにマルクス主義とは一見無関係な諸理論を摂取しつつ、高度な知的操作を加えているため、彼の議論はますます難しいものとなっている。

- (7) Jameson, *The Prison-House of Language*, pp.43-98. フレドリック・ジェイムソン（川口喬一訳）『言語の牢獄：構造主義とロシア・フォルマリズム』（法政大学出版局、1988年）43-102頁。ここでジェイムソンは、シクロフスキーのいう「異化」にあたる原語のロシア語のオストラネーニエostranenieを、（英語の適訳がないせいか）そのままイタリック体で用いているが、一か所だけ、defamiliarizationという英訳をあてている（p.50）。この「異化」と比較し得るものとして、ジェイムソンはブレヒトの「異常化効果」Verfremdungを挙げており、その効果とは「日頃自然であると思われる事物や制度が、じつは歴史的なものにすぎないこと、つまりそれは変化の結果であって、それから先もしたがって変化しうるものであることをわれわれに意識させることにある」（同上59頁）。

に気を配るかさもなくば気恥ずかしいお愛想でも口にしてただやりすごすしかない」と特有のユーモアとも皮肉ともとれる言い方をしている<sup>(8)</sup>。

2. 本稿では、ジェイムソンの比較的近年（といっても2010年代）の著作のうち、『資本論を表象する：第一巻の読解』（邦訳『21世紀に、資本論をいかに読むべきか』野尻英一訳<sup>(9)</sup>）と『アメリカン・ユートピア：二重権力と国民皆兵』（ジェイムソンの主論文のほか、それに対するリプライを収めた論文集という形をとっており、現時点で邦訳はないが、ジェイムソンの主論文については田尻芳樹氏による抄訳がある<sup>(10)</sup>）を以下でとりあげる。前者は以下で便宜上『資本論読解』、後者は『アメリカン・ユートピア』と記す。なお、『アメリカン・ユートピア』について、本稿では、ジェイムソンの主論文のみを扱う。これらから直接引用したり、要約したりする場合、文末に邦訳と原書の頁数を併記する。邦訳がない部分を引用したり言及したりする場合は、原書の頁数のみを文末に記す。

ここでまずとりあげる『資本論読解』は、通常の資本論解説書や注釈書とは、やはり面持ちを異にすると云わざるをえない<sup>(11)</sup>（決してジェイムソンが突拍子も

(8) テリー・イーグルトン（大橋洋一ほか訳）『批評の政治学：マルクス主義とポストモダン』（平凡社、1986年）118頁。

(9) Fredric Jameson, *Representing Capital: A Reading of Volume One* (Verso, 2011). フレドリック・ジェイムソン（野尻英一訳）『21世紀に、資本論をいかによむべきか？』（作品社、2015年）

(10) Fredric Jameson (Edited by Savoј Zizek), *An American Utopia: Dual Power and the Universal Army* (Verso, 2016). ここに収録されているジェイムソンの主論文の抄訳は、田尻芳樹訳「アメリカのユートピア」、『社会運動』420号（2015年10月号）128-149頁。なお抄訳のほうが、原著（論文集）よりも早く掲載されているが、これはジェイムソンの主論文が講演会を通じてすでに発表されていたからである。

(11) 参考までに本書の目次は以下の通りである（邦訳書による）。序章「資本論をいかに読むべきか」、第1章「カテゴリーの演奏」、第2章「対立物の統一」、第3章「コーダ（終楽章）としての歴史」、第4章「『資本論』の時間性」、第5章「『資

ない解釈や仮説を打ち立てているわけではないのだが)。例えば、マルクス『資本論』第一巻の第一遍「商品と貨幣」(初めの三章)は、後続の章に比べて過度に難解で弁証法的で、前述のように「商品の物神的性質とその秘密」の節などは、ありふれた日常的なものをカッコに入れて現象学的に疑おうとする哲学的視点からは好まれることはあっても、通常のマックス経済学者などからは敬遠されたり、ほとんど無視されることも少なくはなかった。アルチュセールのような著名なマルクス主義哲学者も、ヘーゲル的なものを批判するあまり、第一遍を「後回し」することを提唱していたことで知られる。ジェイムソンは今回この問題に改めてとり組み、第一遍を「小さいけれどもそれ自体で完結した論文」とみなすことを提案し、『資本論』第一巻の中での適切な地位を与えようとする。こうした試みは真摯なアプローチであると言えるが、その際、ジェイムソンはいう。

それ(資本論第一遍)は、オペラの序曲の比喻で理解されるべきものではなく、むしろワーグナーの『ラインの黄金』(まさに『資本論』の「第一遍」とほぼ同じ時期に構想されている)のようなタイプの、衛星のような小さな独立体である——ちょうど古代ギリシアにおいてサチュロス劇が(三つの悲劇の後に)締めくくりをつとめるのと同じように、四部作の開始を告げる開幕のスペクタクルなのである(23頁/p.13.)。

これはジェイムソンの言い回しの中でも、少なくとも文章としてはひじょうにわかりやすい部類に入り、とりたてて奇抜でもないが、ひとたび『資本論』

---

本論』の空間性」、第6章「『資本論』と弁証法」、第7章「政治的結論」。なお本書は原書でも約150頁(邦訳で約300頁)であり、『資本論』を論じたものとしてはあまりにもコンパクトではないかという意見も聞かれる(ジェイムソンの主要な著作は、もっと長いものが多い)。しかし長ければよいというものもないし、ジェイムソンとしては、『資本論』について言及する場合、おそらくいくらかでも長く書いてしまうだろうが、あえて要綱的にコンパクトにまとめたのだろうか。

の現代的意義について勉強しようとした社会的意識あふれる読者は、この時点でワーグナーの歌劇と古代ギリシア悲劇の特徴についての素養を求められる。このようなアナロジーの頻出や知的ハードルの高さに遭遇してジェイムソンに辟易する読者も少なくはない。しかしだからといって、しばしば聞かれたように、ジェイムソンの言っていることなど労働者階級やプロレタリアートにとって何の現実味があるのだなどと退けてしまうのは、惜しい。すでに80歳を超えたジェイムソンのような、マルクス主義の知的系譜が生み出した現代の最高の知性に接することは、ここ20年ほどのグローバル資本の凱旋行進が世界中でもたらした数々の不条理の中で、かすかな希望の灯を見出すことに等しいと考える。また、そもそも実証主義や経験主義の本場で、それとは異質な「弁証法」にジェイムソンが執着することについても考えてみる必要があろう。ジェイムソンは、米国人であるが、先に触れたイーグルトンをして「ジェイムソンの文体は、コスモポリタンのというよりは国籍不明なのだ。決してヨーロッパの亜流というわけではないのだが、かといって、私のごとき一英国人の目には、その文体がアメリカ的なところなどほとんどないものと映るのである」と言わせている<sup>(12)</sup>。この「アメリカ的なところなどほとんどない」ジェイムソンが近時、『アメリカン・ユートピア』という論考を発表しているのはどういうことなのか、という問題も興味をそそられる。

3. 日本は、かつて『資本論』の注釈、解釈などに関しては、宇野弘蔵やその影響下での一連の研究などを持ち出すまでもなく、少なくともアカデミズムの世界では、ある意味でソ連や東独以上に「マルクス大国」であった。逆にソ連や東独では、マルクス研究は、全集の刊行など文献学的には特筆すべきものは多々あっても、共産党の統制下で自由闊達な議論とは言えなかった<sup>(13)</sup>。ただし

---

(12) 前掲、イーグルトン、122頁。

(13) ソ連では共産党幹部は概してマルクスやレーニンをまともに読んでいなかったが、皮肉なことにそれらを真剣に読んでいた最後の共産党指導者はスターリンであった。ただ、スターリンに粛清されたブハーリンは、スターリンのことを



日本の「マルクス大国」ぶりも、「経済大国」ぶりと同様に、90年代にあっけなく崩壊し、今はむしろその遺産をある種の郷愁とともに回顧する時代になっているのだが（終身雇用制も悪くはなかったとか、日本のマルクス研究の水準は玉石混交にせよ欧米と比べても高かったとか）。

そうしたかつての「マルクス大国」事情もあり、英米系のマルクス主義関連の研究や著作については、一部の文化批評的な視点を除けば、少なくとも『資本論』を論じたものなどについては、日本で積極的に紹介されてきたわけではない。その多くに特段新鮮味があったわけではなかったからだろうし、少なくともマルクス主義関連については日本では英米系よりも仏独系のものをありがたがる傾向にあった（例外としてはイマニュエル・ウォーラーステインや近時ではデヴィッド・ハーヴェイの一連の著作の翻訳や紹介がある）。

他方、ジェイムソンの近年の『資本論読解』は、彼特有の語法や分析手法の点では、独創的でとりあげるに値すると思われるが、それは日本社会への適用可能性よりもグローバル資本主義の全体性理解のためだろう。その場合でも、先に言及したように伝統的なマルクス経済学の視点などに馴染んだ者からすれば、ジェイムソンの言っていることは、とっつきやすいものではない。しかし、ジェイムソンが本書で述べていることが、何から何まで迷宮のようなものかという、そうではなく、反面、驚くほどあっさりとして『資本論』の性格付けをしている箇所もあり、逆にそれが特段目新しいことなのか、もっと深読みすべきことなのか、判断に迷うところもある。例えば本書冒頭付近では次のように言っている。

『資本論』（第1巻）は、政治についての本ではないし、労働についての本

---

「マルクスを読むチンギス・ハーン」と言ったとされ、確かにモンゴルから軍事的専制様式を受け継ぎ、ビザンチン帝国から皇帝教皇主義を受け継いだロシア（皇帝が聖と俗の最高権威を兼ね、後のソ連歴代指導者は党と国家の最高権威を兼ねる）で、スターリンが、マルクス主義を実地に移そうとしたら、ソ連邦のような国になることは十分に考えられる。

ですらない。『資本論』は失業についての本なのである。私はこのスキャンダラスな主張を、『資本論』の議論の各段階およびその要点ごとの展開に注意を払うことによって、証明していくつもりである（5頁/pp.2-3.）

『資本論』が政治politicsについての本でないことはわかる（革命戦略だとか未来社会の青写真に関する議論は『資本論』にほとんど登場しない）。他方、労働laborについての本ですらなく失業unemploymentについての本、という見地については、かつて日本のマルクス主義の系譜において、類似の主張をした論者がいたかどうか寡聞にして知らないが、それがスキャンダラスな主張かどうかはともかく、ジェイムソンの真意のほどは、本書冒頭付近では、むろん不明である。資本の蓄積過程でのいわゆる有機的構成の高度化（技術革新の進展による資本中に占める労働力購買にあてる可変資本の比率の相対的低下）とともに、相対的過剰人口、産業予備軍が構造的に生み出されていくという『資本論』第1巻の教科書的理解に即していえば、労働と失業は表裏一体にあるため、労働についての本ですらなく失業についての本というのは、なにやらレトリカルな言い回しにも思えてくるが、それについては、また後ほど立ち戻るつもりである。

ただ、即座にわかるのは、ジェイムソンが、『資本論』は「失業」にスポットを当てたというようなことを単に言おうとしているわけではないことである。ジェイムソンがかねてから避けてきたのが、個別イシュー化や断片化とその対症療法である。本書でも、一般に経済学者がシステムの枠内、市場の内部で、実用的な解決、修正案を提供しようとしてきたが、システムを全体として理論化しようとはしなかったと批判している。ジェイムソンの飽くなき「全体化」使命とあいまって、システムを全体として理論化することこそが、マルクスの野望であったとする（6頁/p.3.）<sup>(14)</sup>

- 
- (14) マルクス主義における「全体化」の指向性を扱った労作としては以下の著作がある。Martin Jay, *Marxism and Totality* (University of California Press, 1984). マーティン・ジェイ（荒川磯男ほか訳）『マルクス主義と全体性：ルカーチか

こうした「全体化」使命においてジェイムソンが主題化しているのが「表象そのもののもつジレンマ」 dilemma of representation as suchである。ここら辺のくだりも、通常のマルクス主義の教説に慣れていたような読者さえを遠ざける契機が含まれているが、ジェイムソンによれば、この「表象」(representation, マルクスの使う *Darstellung*) の問題こそが、狭義の修辞、文学理論の問題のみならず、今日の経済学や政治理論を不安定なものにしているという(金融資本やデリバティブの不可視性、「国家とは何か」という伝統的な問いに加わる「国家はどこにあるのか」という現代の問など)(8頁/ pp.4-5.)。確かに、例えば資本主義 capitalism、マルクスのいう資本制生産様式 kapitalistische Produktionweise (ジェイムソンもこの意味で便宜的に「資本主義」と言っているのだと思われる) という名指し方は、マルクスの影響下でない経済学者などであれば、何の留保もなしに使用を避けるかもしれないし、こうした面ですでに表象の齟齬が起きているはずである。「市場経済と資本主義とどう違うのか」という、よくある質問(これもいわば表象の食い違い)にまで、この問題を俗流化しなくてもよいかもしれないが、非歴史的 ahistorical な市場経済モデルからみた場合の、「階級史観で歪められた資本主義像(資本主義など存在しない)」といった、いわば「歪曲された表象」を批判する態度が仮にあったとすると、それに対してジェイムソンであれば、資本主義はニュートラルな概念だなどというのでは決してなく、以下で触れていくように、マルクスの『資本論』がいかにシステムとしての資本主義を発見しつつ、その全体としての表象を目指したのか、その際の弁証法的思考とは何か、という風の問題を立てるだろう。

ただ「全体性としての資本主義 capitalism as totality」といっても、ジェイムソンによれば、資本主義はそれ自体としては不可視であり(資本主義を一望できるアルキメデスの支点は存在しない?)、ただ症候 symptoms においてのみ見えるものであるという、精神分析のアナロジーが用いられている(マルク

ス主義と精神分析との接合は古くはウィルヘルム・ライヒなどに見られたが、1980年代以降、アルチュセールを経てフロイト、ラカンの理論との融合がジェイムソンによって発展させられた。資本主義のモデルを構成しようとすることは、必ず成功かつ失敗するのであり、ある特徴が前面に出てくると、他の特徴は無視され、あるいは誤って表象され、すべての可能な表象は、多種多様、混交的で、互いに通約不可能で、資本主義の全体性は、複数のアプローチの混合に留まるしかなく、「まさにこの通約不可能性 *incommensurability* が、弁証法の存在理由そのもの」だという (11頁/pp.6-7.)。

かくして、ジェイムソンが、経験主義と実証主義の本場である英米にあって、その対極にある弁証法に病的なまでに執着を見せることが、本書でも際立っており、弁証法が資本主義の表象可能性/不可能性に不可欠なものとして中心的な位置を占めることになる。あるいは近代の資本主義の幕開けが、ヘーゲルにみられるように弁証法への道を切り開いたというべきなのだろう。

ひとくちに弁証法といっても、一般にそれはとりとめもなく、時には弁証法とは闇夜では白い牛も黒く見えるといった(白を黒という)詭弁の類とみなされることもあるが、ジェイムソンにとって弁証法とは、さしあたり思考の複数のモードの非互換性を調和させる試みとして位置づけられ、その例として『資本論』に即して社会階級概念が出されている。ジェイムソンによれば、階級概念は、伝統的には、社会学的、政治的概念であったり、スローガンであったり、いずれの観点も不十分さを免れ得ず、「定義という形式そのものが受け入れ不可能」であり、それは一種の視差 *parallax* において暫定的にアプローチしうるのであって、この視差が「互換不可能なアプローチの多重的な集合の空虚な中心に階級を見出す」のであり、社会階級は資本主義の「写像」である (11頁/p.7.「写像」の原語は *function* なので「関数」とも訳しえる)。

なるほど『資本論』では、19世紀イギリスの工場立法をめぐる叙述を見る限り、「資本家階級」、「労働者階級」が実体的なものとしてイメージされてくるし、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』にいたっては、この点で、一級の資料なのだろう。かたや(ポストモダンな)後期資本主義社会、

大衆消費社会がある時期から拡大し、労使協調も進み、ストライキなど行われなくなり、加えて所有と経営との分離の下では、そもそも資本家階級とは誰なのか、プロレタリアートとは誰なのかという疑問が呈されても不自然ではなくなった。とはいえ、階級格差など解消してしまったかのような「総中流」とさえ一時期呼ばれた社会でも、資本の力は消失していったどころか、その後も拡大の一途をたどった。資本が労働力を用いて生産している以上、「階級闘争」のようなスローガンがリアリティを失った社会においても、階級は「ない」が厳然と「ある」のである。あるいは、こういってよければ、ひとたび階級意識が喪失した社会で階級関係は猛威を振るい始め、理論の領域では、階級構造から説明されるべきことも方法論的個人主義と選好関係によって説明され（英米で新自由主義が勝利すると、アカデミズムの世界で一步遅れて理論における新自由主義段階が完成したのは、マルクス主義の悪名高き「土台・上部構造」の戯画のようであった）、為政者にとっては祝福すべき自己責任大国が到来したとなると、ジェイムソンが社会階級を例に教えてくれることは案外深刻なこともかもしれない。

そうなると、おそらく「自由」や「公正」、あるいは平等といった概念も、弁証法に服すべきものなのだろう。マルクスも認めているように資本主義社会は自由で平等な社会であり、労働力の自由な売買が行われている社会は「天賦人権思想の楽園」である（『資本論』第1巻第4章）。システムとしての資本主義は、全体的にみれば労働力商品の市場と生産物市場でそれぞれ等価交換が行われている場であり、そこには原則的に詐欺や意に反した一方的収奪はないか、あったとしても逸脱か犯罪とされる。もちろん、マルクスは自由や平等を基本的にブルジョア的な概念とみなしており、それ以上の理念的意味を見出していない。裏返していえば、身分的鎖から解き放たれた「自由」な労働力は、資本に従属するしかない（身体を切り売りすることはできないが身体能力の一部である「労働力」を切り売りしなければならない）。経済的強制からの解放は、経済的強制を招き寄せるのであり、剰余価値は「自由」な労働力売買と契約社会における人格の「平等」（法の下の平等）によってシステムとして実

現される。こうした「自由」、「平等」は、構造的にその対立物（階級社会）を作り出し、今日に至るまで自由で公正な社会に関する政治哲学モデルは、ジェイムソンが援用しているヘーゲル語でいうと「その概念のレベルに上昇する」ことができない。そのため、旧社会主義国のプロパガンダであれば資本主義社会における自由や平等は「虚偽」であると言っただろうし、そうでなくても、今日、「自由」、「平等」といったイデオロギー内部での対立が深刻であり、ある自由は別の意味で不自由であり、「○△の平等」といった限定モデルは必然的に「不平等」である。自由や平等という空のシニフィアン empty signifier をめぐる言説闘争だと言ってしまうればそれまでであるが、「ある特徴が前面に出てくると、他の特徴は無視され、あるいは誤って表象され、すべての可能な表象は、多種多様、混交的で、互に通約不可能」であるから、このような矛盾の統一体としての資本主義（自由と不自由との同一性、平等と不平等との同一性）は、弁証法的思考を通じてのみ、その表象の可能性に向かうというのが、おそらくジェイムソンの確信なのだと思う。なお、弁証法については、本書序論での言及のみならず、第1章のタイトルが「カテゴリーの演奏」、第2章のそれが「対立物の統一」となっており、第6章が「『資本論』と弁証法」となっており、結局、本書全体が弁証法の織物となっていることがわかる。したがって、以下でもジェイムソンが弁証法に託した意味合いについて必要に応じて触れる。

4. 資本論第1巻冒頭ではx量の商品a = y量の商品b、例えば20エルのリンネル = 1着の上着といった如く単純な等式が出てきて、当初は、貨幣が登場する前の物々交換の仮説事例かと早合点してしまいそうになるが、ジェイムソンはこれのある一つの対象が別の対象と統合で結ばれる等価性、同等性についてのイデオロギー批判、より根本的には（思考と言語の慣習的な形式としての）方程式の批判の開始と読み替える（28-36頁 / pp.17-23.）。ヘーゲルの「承認をめぐる主人と奴隷の闘争」では、登場人物が封建的な名誉をめぐる闘争し、やがて封建秩序と旧体制のカーズの終わりを告げる「ブルジョア革命と公民権

についての形而上学的教説」となるが、今やマルクスにおいて問題になっているのは商品所有者を担い手とする同等で相対的な二つのポジションであり、「交換の枠組みと交換価値の普遍的な力が、いまや別種の不平等性を作り出していることを明らかにする」ものである(48-53頁/pp.30-33.)。不平等の謎は不等価交換にあるのではなく等価物同士の交換にあり、しかも、貨幣形態こそが、リンネルにしても上着にしても両者の相互関係が単一の対象に還元され「普遍的な等価形態そのものへと、より決定的に物象化したもの」である(55頁/p.34.)。貨幣形態の登場によって、いかにして一つのものが他のものと「等価物」となりえるのかという(アリストテレス以来の)等式の不可能性の謎は、解決したのではなく解消してしまったのである。

なおジェイムソンは、資本主義の表象に際して、フィギュレーション *figuration* という特有の造語を多用しており、邦訳では「比喩形象」となっている。これについては本書訳者の野尻栄一氏が、ジェイムソンの師アウエルバッハの聖書解釈学にまで遡ってわかりやすく説明しているが(257-262頁)、その他、以下で気づいた範囲で述べると、おそらくジェイムソンは、マルクスの『資本論』に冒頭から登場する使用価値と交換価値、具体的有用労働と抽象的人間労働、相対的価値形態と等価形態といった当初は謎に満ちた対句的用語の展開を、単にマルクス流の、資本主義という対象の抽象化、概念的分節化としてとらえるのみならず、「比喩形象は、概念化しようとする対象が何らかのかたちで、その構造的な多義性のために表象不可能であるときに出現する傾向にある」(54頁/pp.33-34.) とあるように、やはり弁証法的な思考作用の一環としてとらえているとみてよいだろう。

例えば、後にも出てくるように資本主義社会における「労働」とは何か、そもそも表象困難であるが、商品の使用価値と交換価値との分裂に即していうと、それはさしあたり前者に即した質的に他と比較不可能な具体的有用労働の側面を持っているにしても(机を作る労働と上着を作る労働とを比較しようがない)、同時に、チャップリンの「モダンタイムス」で戯画化がなされたように、取り換え・交換可能な抽象的人間労働に向かわざるを得ないだろう。近時の義



論に即していうと、労働力商品が「人工知能」に代替され得るとしたら、それは抽象的人間労働の王国においてであろう。ただしその場合、「人工知能」はもはや剰余価値を生み出す労働力ではなく、不変資本の比率の増加を意味するから、資本の有機的構成の高度化がますます進み、ネオ・ラッグイト運動のようなものが起こりにくいとなると、いっそうの利潤率の低下に悩まされるという、資本主義にとってはディストピアが待ち受けているかもしれない。

マルクスが『資本論』第1版の序文で、「経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学的試薬も用いるわけにいかぬ。抽象力 *Abstraktionskraft* なるものがこの両者に代わらなければならぬ」と述べていたことは比較的有名だが、この抽象力とは、単に目の前の対象を「花」とか「葉」、「茎」という具合に分節化していく力ではなく、「生成した一切の形態を運動の流れの中に、したがってまた、その経過的な側面にしたがって理解するもの」（マルクス、同序文）である。『資本論』の「価値形態論」においても、「貨幣」という実体ではなく、わざわざ「一般的等価形態（としての貨幣形態）」といわれているのは、前述のように、この形態、ポジションの成立が、異なったもの同士が等号で結ばれるという等価の謎を、解決ではなく解消してしまうという究極の物象化——関係が消失してモノに乗り移る——の過程を内に含んだ概念であり、単に交換者双方の欲望の一致という困難さを打開し交換を活発にするためのメディアとしての貨幣という無矛盾的な概念よりもはるかに豊かな概念であろう。そうした生成と過程とを内に含む諸概念（の展開）をジェイムソンは「比喩形象」と言っているのだと思われる。「絶対的剰余価値」、「相対的剰余価値」という対句も同様であろう。こうした概念自体、経験的に察知可能というよりも、高度な抽象化の産物であるが、剰余価値の増加が、労働時間延長のみならず、生産力の上昇と効率性の追求が労働力の価値を下げるというしっぺ返し（後述のようにジェイムソンは「復讐を伴った疎外行為」と呼んでいる）によっても果たされることを表象し得るのであり、ジェイムソンは、資本主義の表象を、その表象の危機に端を發して、様々の比喩形象の劇場としてとらえているのである。このような比喩形象の展開を通じて表象されていく「対立物の統一」としての資本主義は、マル



クスが資本の蓄積過程における一般的法則性として明らかにし、なおかつジェイムソンが強調するように、生産力と窮乏との同一性であり、技術的生产力と一体のものとしての人間の苦痛、生命の浪費である（214頁/p.127.）。このことを抽象的に言い換えると、弁証法は、「肯定的なものと否定的なものの絶えざる位置の交代であり、一方からもう一方への絶えざる変容」であるにしても（220頁/p.131.）、ジェイムソンは弁証法が常識的な思考やイデオロギーにはなり得ないとし、弁証法的な思考は特異 singular なものであると述べる（229-230頁/p.137.）。これは、前述のように歴史的な現象としての資本主義の把握、あるいはその「表象」可能性が、弁証法的な思考を強いると言っているようにも思える。その点では、ジェイムソンは弁証法を古今東西、神羅万象を説明し得る打ち出の小槌だなどと強弁しているのでは決してない。「全体化」の使命と並ぶ「歴史化せよ」というジェイムソンの<sup>(15)</sup>な至高の命令に、弁証法の存在もまた従うのである（弁証法の歴史性）。

ジェイムソンが手厳しいのは、マルクス主義から弁証法を洗い出してしまった、いわゆる「分析的マルクス主義」Analytical Marxism 学派に対してであって、システムとしての資本主義の把握ができなくなってしまう、一般的な社会民主主義的な結論、福祉やケインジアン的な救済策につながるものに過ぎないとみなす。逆に、「弁証法的な定式の衝撃は、資本主義的な生産様式が、社会民主主義のような施策によっては任意に停止することができないかたちで拡大を続け、生産を続けるものであること、新しい価値の蓄積と失業者予備軍の拡大とが破滅的な一体となっていることを強調することにあった」（216-217頁/pp.129-130.）。ジェイムソンからみると、「分析的マルクス主義」学派は、いわば、たらいの水と一緒に赤子を流してしまったのである。

---

(15) 『政治的無意識』の序文は「つねに歴史化せよ Always historicize」という「あらゆる弁証法的思考から発せられる『超歴史的』命令」によって始まる。Jameson, *The Political Unconscious*, p.9. ジェイムソン（大橋洋一ほか訳）『政治的無意識』（平凡社、2010年）10頁。

5. 『資本論』が政治についての書物ではないとはいえ、『資本論』の中に時折顔を出す「自由な生産者のアソシエーション」というユートピア、「否定の否定」としての（私的所有ではない）個体的所有の復権、そして「資本制的私的所有の葬鐘が鳴る、収奪者たちが収奪される」という黙示録的な予言ゆえに、例えば宇野弘蔵の「マルクス経済学」では、イデオロギーと科学とが峻別され、マルクスの政治的予言が「社会科学としての経済学」から注意深く取り除かれた。これは、宇野自身が一人の知識人として何らかの社会主義を展望していたことと矛盾していたわけではないが、未来の展望と資本制社会の「科学的」分析との混交が戒められたのである。

ジェイムソンの『資本論読解』では、終章が「政治的結論」となっているが、これはジェイムソンが『資本論』にことさら政治的メッセージを読み込むということではない。むしろ、『資本論』第一巻に政治的結論は一切含まれていないものの、同書が労働者階級のバイブルとされたり、『共産党宣言』の著者によるものであったりする逆説には一定の説明を要する、ということに発している(234頁/p.139)。ジェイムソンは政治と政治理論とを分けたくうえで、前者(マキャベリ、クラウゼヴィッツ、ソレル、レーニンらに見いだされる戦略や実践)と区別される後者とは、何らかの仕方での憲法 constitution についての理論であり、憲法の構成に向かうものであるとし、「憲法は、つねに反革命的な建設であり、右からのものであれ(クーデターや「専制政治」)左からのものであれ(大衆による「破壊行為」や革命)、変化を排除するようにデザインされている」(234-235頁/p.139.)。ただしジェイムソンは、ジョン・ロックの思想について、マクファーソンを経由しつつ「政治理論の概念性が決定的に機能しないとき、そのときこそが貨幣の出現の契機であるということを宿命的に暴露する契機が含まれる」とし、それが意味するのは、政治理論(憲法理論)がもはや自律的に機能することができないことであり、その根底には「私有財産」という「憲法の構成にとって、まったく扱うことがやっかいな現実」がある(235頁/p.140.)。例によって、ジェイムソン流の、決してわかりやすすくない言い方だが、貨幣の出現が政治理論(憲法理論)の自律的機能を蝕むと素直に理解す

るしかない。

マクファーソンは、自著『所有的個人主義の政治理論』におけるロックの所有論において、ロックが論じている貨幣の出現に際して、そこでの貨幣は単なる交換手段ではなく資本であり商品とみなされているとし、ロックが自己の「生命」を譲渡する自然権を否定しながらも自己の「労働」を譲渡する自然権を仮定しており、資本主義社会にたいするひとつの積極的な道徳的基礎を提供したとみなしている。そしてマクファーソンは次のように結論付けている。

決定的な要因は、ロックが心に描いた平等な自然的諸権利が、所有の無制限な蓄積への権利を含んでいたため、論理的には差別的な階級的権利に、したがって階級国家の正当化に導いた、ということであった。ロックの混乱は、それ自身の矛盾を含んでいた平等な自然権という公準からのまっとうな演繹の結果である。証拠が示唆するところでは、彼は、無制限な所有への平等な自然権という公準の中にある矛盾を悟らず、たんに、権利の領域（ないしは自然状態）の中へ、彼が文明社会では正常なものとして受け入れた社会的関係を読み込んだのである。この見解において、彼の理論の諸矛盾の源泉は、必然的に階級的内容をもっていた権利や義務を、普遍的（非階級的）用語で述べようとする彼の試みなのである。<sup>(16)</sup>

このようにみると、「平等な自然権という公準の中にある矛盾を悟ら」ない非弁証法的なロックの議論は、マルクスによって、いわゆる領有法則の転回論を通じて、普遍的なもの（平等な自然権）と特殊なもの（階級利害）との統一という形で昇華されたと言えなくもない。憲法制定を反革命的な建設とまで言い切るジェイムソンは、社会的敵対性の解決ではなく、それを解消してしまう私有財産権（の保護）に、貨幣とともに究極の物象化を見出しているの

---

(16) C・B・マクファーソン（藤野渉ほか訳）『所有的個人主義の政治理論』（合同出版、1980年）276頁。

だろう。憲法に関して、ジェイムソンはアントニオ・ネグリの「構成的権力」 constituent power と「構成された権力」 constituted power との関係をめぐる議論を評価しているが、ジェイムソンが希望を見出すのは、後述のように「二重権力」のようなプロジェクト、社会的敵対性が「構成的権力」と「構成された権力」との矛盾となって現れる瞬間なのである。

『資本論』は政治的書物ではなく、とりたてて政治的メッセージを発しているわけでもないが、政治理論や権利の語法がいかに資本主義的生産関係の浸食を受けつつ自立化し、物象化していくのかについての手がかりとはなっている。

6. 『資本論』における客観的なものと主体的なものという二元論は、ジェイムソンがマルクス主義哲学者のカール・コルシュから借用してきたものだが、ここでいう客観的なものは価値法則や資本の蓄積過程などの「法則性」を指し、主観的なものは「階級闘争」という営みである (238-239頁/p.142.)。ジェイムソンは、この二元論自体が弁証法的なものだとし、客観的なシステム（全体性としての資本主義）に強調を置けば、システムが非常に強大なもので、それに囚われた個人は何事かをなす力をもつことがほとんどできないし、行為主体に強調を置くと、時として主体や行為者は非人間的なシステムよりも強い力を持ち、システムを克服する可能性を有することになるとしている (242頁/p.144.)。

ジェイムソンによれば、そもそもフィクションや文学のみならず科学的なものやノンフィクションなど、すべてのテキストは政治的な効果をもっており、例えば文学は、必然的に犠牲者や被抑圧者を描き出し、犠牲者に対する憐憫やシステムに対する義憤を喚起するように計算されており、他方で文学は英雄的行為を描き、称賛を喚起し、読者を鼓舞して行動の呼びかけともなり、そこでは運命論と主体論が交差する。マルクスのテキストでは、行動主義が前面に出るのは、1848年『共産党宣言』の革命的な数年間やパリ・コミュンに前後する数年間であるが、その後、経済システムとその無慈悲な論理を強調する運

命論が支配的になったという（242-243頁/ pp.144-145.）。『資本論』では、この無慈悲な資本制の論理が前面に出ているが、ジェイムソンは、現下のグローバル化では、システムがこれまでになく強大かつ完全に人間を超えたものとなり、いかなる形態の個人的な抵抗も無力であるという感覚が存在するが、同時にシアトルやサパティスタの反乱、イスラム運動のような多様な抵抗もあり、ただし運動相互間では共有された目的などもないという（244-245頁/ pp.145-146.）。

ジェイムソンは、「このような状況にあって、資本主義そのもののシステムの性質の無慈悲なふるまいを強く主張する『資本論』の読み方を提供することは、有益」と考える。なぜなら、それは「システムの全体的な分析のもつ利点を復活することができる」からである（245頁/p.146.）。

では、『資本論』を一つの全体的なシステムとして読むことの「利点」とは何か。

…資本主義は全体的なシステムであるという教えは、以下のことを示すためにある。つまりシステムは修復など不可能であり、その修復はそもそもシステムの存続を長引かせることを意図しており、必然的にシステムを強化し拡大することに終わるのである。したがってこれは、かつて社会民主主義と呼ばれていたものに対する批判である。今日、社会民主主義は、その過去の歴史においてかつてなかったほど公然と、資本主義の修復の可能性を主張している。あるいはそうでなければ、否定的な示し方で、しぶしぶと、他に可能なシステムなど存在せず、したがって残る道はただ細切れに不公正と不平等を減らしていくだけであるという説得に同意しているのである。（原文改行）しかし「不公正と不平等」は、この全体的なシステムそのものと構造的に一体のものであり、不公正や不平等は決して修復などされないと示したことが、まさに『資本論』の力であり、建設的な偉業なのである。経済的なものと政治的なものとが融合したシステムにおいては、政府による規制などの戦略はたんに口先だけの構成物であり、イデオロギー的なトリックである。

というのは、定義からして、そうした戦略の機能と目的はシステムそれ自体をより円滑に機能させることにあるからである。(246-247頁/pp.146-147.)

例えば日本の左翼運動史においても「社会民主主義」は「シャミン」とも言われて侮蔑用語であったのであり、社会民主主義が資本主義の延命装置だという考え自体はそれほど衝撃的なことではないが、ソ連邦崩壊後の（イギリス労働党にみられるような）「第三の道」から米民主党の失墜はもとより、今日、「(自国)労働者階級の味方」となった右翼ポピュリズム政党もグローバル資本主義の「客観的な」力にはなすすべもなく、外敵（移民、イスラーム）に不満のはけ口を求めている状況をみれば、ジェイムソンの指摘は、再度確認しておく意義があろう。

7. 先に触れたように本書冒頭付近でジェイムソンは、『資本論』は政治についての本でないし、労働についての本ですらなく失業についての本だ、という表明をした。これについては、本書第5章『『資本論』の空間性』、第6章『『資本論』と弁証法』、第7章「政治的結論」で改めて論じられており、とりわけ第5章では、『資本論』第1巻の「労働日」や「分業とマニファクチュア」などの比較的長大な章からの引用が、本書ではめずらしく頻繁になされている。いずれも機械と分業の発達による労働者の部分労働者化、昼夜を問わないパン職人の過酷な労働、劣悪な生活、児童労働の酷使に関するマルクスの叙述からであり、ともすると抽象的な理論が重きをなす『資本論』第1巻の現代的読解の中では、歴史的なエピソードとして見過ごされがちな部分である。もともと文学テキストの読解に長けているジェイムソンだから、マルクスによる当時の労働者階級の細部の描写を見過ごすこともない。ただ意外なことにジェイムソンは、『資本論』という「労働者階級のバイブル」が「ほとんどまったく労働を扱っていない」という(186頁/p.112.)。これはどういうことか。

労働の実存的な経験を再生産することは不可能であり、この経験によって

われわれは資本の王国の外へとともかくも導かれるのであるが、資本は労働の生きた質には関心を払わず、ただその量と、そこから抽出される剰余価値にのみ、関心があるのである（186頁/p.112.）。

『資本論』第8章「労働日」についても、それは労働についての章ではなく、極限における労働の不可能性、疲弊の際にある身体、その酷使についてであり、その深部における主題は、具体的労働ではなく階級闘争であるとジェイムソンは述べる（188-189頁/ p.113.）。ジェイムソンの言っていることは、表象の可能性/不可能性ということにかかわってこようが、資本によって強いられた労働は、本当の意味での労働ではないという、ある種の疎外alienation論の名残としてみることも可能かもしれないし、現に、本書第6章では、改めて疎外論にスポットが当てられている（218-220頁/ pp.130-132.）。日本のマルクス主義思想の系譜では、一時期、「疎外論から物象化論へ」という（疎外論を克服対象とする）議論がみられたが、ルカーチの「物象化とプロレタリアートの意識」以来の物象化論の遺産を受け継ぐジェイムソンは、だからといって疎外論を克服対象とするわけではなく、「疎外論も物象化論も」といったところだろうか。ジェイムソンは次のようにいう。

じっさいのところ、疎外概念——そのもっともヘーゲル的な形式においては、そもそも生産物を自分から分離したものとして生産してしまうことによって私は私の生産物を疎外してしまうのであるが、そのことによって私の生産物はまったく異質な対象、異質な力として、私の眼前に立ちはだかってくるという事態——は、まさに『資本論』の構造そのものにそのまま組み込まれているのである。われわれが見てきたように、労働者階級は、みずからを縛る「金の鎖」を自ら鍛造し、その賃金を資本に前貸しし、自らの剰余労働によって剰余価値の蓄積を増進する。この際、労働者階級は、資本主義が進めてくる労働者の抵抗に対応した発明や新しい技術の導入を奨励することさえ忘れないのである。ここにわれわれが見出だすのは、まさしく復讐を



伴った疎外行為の形式である。(218-219頁/pp.130-131.)

こうした「疎外」を組み込んだ資本主義をひとつの全体的システムとして考える際、ジェイムソンは、『資本論』が労働についての本ですらないと主張しつつも、資本主義的生産と失業との結合に改めて着目し、現下のグローバリゼーションが、このプロセスを強力に推し進めてきた意味で、『資本論』の今日性が浮かび上がるという(248頁/pp.147-148)。その際、第二次大戦後の主要先進国における農業人口の比率低下に関するデータが採用されているが、以前と異なって、農村や植民地がもはや失業者を吸収できなくなっており、今日、失業という現象が、以前と不況と異なって、はるかに不吉なシステムの危機の予兆となっているとみなす。つまり、相対的過剰人口、「産業予備軍」は、かつてシステムの二次的な要因であったが、今日それは最前線に移動した(248-249頁/pp.148-149)。だからといって『資本論』は構造的失業を完全雇用政策によって是正することを唱えたのではなく、失業は資本主義の本質を構成する蓄積と拡大と構造的に切り離すことができないことを示したのであり、現在世界中に広がる膨大な失業人口をジェイムソンは「ロスト・ポピュレーション」と呼び、「歴史から脱落した」存在になっているとみなす(250頁/p.149)。

ジェイムソンは本書の結論部分では、「ロスト・ポピュレーション」を、支配の観点からではなくて搾取の観点から考え直すことを提唱している(252-254頁/pp.150-151)。支配の観点というのは、ここ数十年ほど(とりわけポスト冷戦時代に)興隆してきた様々な市民権論、ラディカル・デモクラシー、政治哲学などで議論されてきたように、ときおりフーコーなどの影響も伴いつつ権力や文化的ヘゲモニーの視点から様々なマイノリティや周縁者の境遇や権利を重視する観点であろう。それは例えば民主主義的な公共圏といった議論にも連なるが、それに対してジェイムソンは、搾取を重視する立場から社会主義のプログラムを重視する。「支配の観点からではなくて搾取の観点から」という見地自体は、斬新というよりも、マルクス主義の教説からすれば、むしろオーソドックスとさえいえるが、やはりここ数十年ほどの(ポスト冷戦時代の)民



主主義論、公共哲学、権利論などの類が、資本の帝国に、ほとんどなすすべもなく、全体性としての資本主義の把握を怠り、破局的な分断を招いてきたことに対する忸怩たる思いがあるのだろうし、ジェイムソンが北米でそれを言っていることは意味深長である。

「ロスト・ポピュレーション」は、かつてアントニオ・ネグリやマイケル・ハートであれば「マルチチユード」という言い方をしていたかもしれないが、その一部は、欧米社会のテロ供給源、Islamic State 戦闘員の供給源ともなり、さらにその一部は、「破綻国家」化した旧ソ連の（働き口がほとんどない）一部の地域からもやってきた。これはグローバル資本主義とISとの同一性（同一性と非同一性との同一性）なのであろうか。

8. ジェイムソンの『資本論読解』が、(宇野弘蔵「マルクス経済学」のように)『資本論』からイデオロギー的な部分を取り除いて「社会科学としての経済学」を目指したようなパラダイムに近いのか、それとも『資本論』をことさら政治的に読み込んで、あるいは生産力と生産関係との矛盾から資本主義の自動的崩壊と革命の必然性として理解したのか。結論からいえば、そのいずれでもないことは明らかである。ジェイムソンはイデオロギーと科学とをことさら峻別しているわけではないが、それでも「マルクス主義」はマルクス死後にエンゲルスが作り出したものであり、そうした「マルクス主義」は、様々な歪められ方はされてきたものの、多数のイデオロギーと政治的实践でもあり、『資本論』のような「科学的」な分析（あるいは学問Wissenschaft、理論）からは区別することができるという(240-241頁/p.143.)。しかしながら、ジェイムソンは、代表作の『政治的無意識』(1981年)において、テキストの解釈に横たわる外ならぬ「政治的無意識」を主題にし、今回の『資本論読解』でも、先述した通り、あるテキストにおける犠牲者や被抑圧者の描き出し方や、そこでの憐憫やシステムに対する義憤の喚起などを、運命論と主体論との交差として論じていたように、資本の蓄積過程での有無をいわせぬ法則性は、圧倒的な力、運命として立ち現れるにしても、だからといってそこから何らかの主体的あるいは共

同的営みが喚起されないわけではないと考える。だから『資本論』第8章の「労働日」に関しても、その真の主題は具体的労働ではなくて階級闘争だと、ジェイムソンはあえて言ったのだろう。

したがって、『資本論』から一部の予言や黙示録的な言説（自由なアソシエーション、収奪者の収奪、個体的所有の復権、等々）などを慎重に取り除いた残りの部分が「科学的」なテキストなどとは言えなくなるだろうし、『資本論』は、資本主義の表象に向かう、弁証法的な含意のある様々な「比喻形象」が登場する劇場なわけだから、そこから何らかの政治的指向性が立ち上がる（「政治的無意識」が横たわる）のは当然のことなのだろう。もちろん、だからといって、イデオロギー的なものと科学的なものとをすべてごちゃ混ぜにして、相対化してしまったということではない。例によって、イデオロギーと科学はジェイムソンにとっては弁証法的な関係にあり、私たちが何か偏見や曇りのない目で資本主義についての科学的な認識に到達しているわけではないのである。

蛇足だが、日本の社会科学史においても主としてマルクスの知的磁場の下で、一時期、「科学としての経済学」はもとより「科学としての法律学」という言われ方がなされ、むしろそれは「自然科学」の「科学」というニュアンスと異なるのはわかるし、「科学者」がイデオロギーと科学とを峻別しようとした良心的意図もわからないでもないが、そうした二項図式も今やジェイムソンの弁証法的思考のもとで調停されるべきものなのかもしれない。

なお『資本論読解』の邦訳タイトルは、『21世紀に資本論をいかに読むべきか?』であるが、原著には「21世紀」という文言は出てこない。これは、おそらくすでに邦訳が出ているトマ・ピケティの『21世紀の資本』にあやかっただ（邪推すれば出版社側の意向による）邦訳タイトルではないだろうか。この邦訳タイトルがミスリーディングだとまでは言えないが、ジェイムソンの原著は、ピケティのフランス語原著よりも早く出版されており、少なくともジェイムソンの中でピケティの議論を意識した形跡はみられない。両者は無関係なので、関係を議論する意味はないが、ただより深刻なのは、ピケティの『21世紀の資本』には、膨大な税務資料などから格差の歴史を実証的に跡付けた点に

多大な業績が認められるとはいえ、タイトルとは裏腹に資本主義が何かということに、ほとんど正面から答えていないことである。ピケティは、各種インタビュー等で、マルクス『資本論』は難しすぎてよくわからないという風に答えており、実際は経済学者としてある程度『資本論』の内容について把握していたとしても、知らないふり、わからないふりをしていたほうが、触らぬ神に祟りなしで無難かもしれない（本格的にマルクス批判を展開しようとしたら、かなりややこしいことになり、そもそもピケティとマルクスとは方法論がおおよそ異なる）、そのことが「難しすぎてよくわからない」という発言に症候的に現れているのかもしれない。つまり、システムとしての（矛盾の統一体）としての資本主義の理論的な全体化作業は、さしあたり関心外で、ピケティとしてはそこを突かれても困るであろう。ピケティのいう「資本」とは、キャピタルゲインだとか不動産収入などのいわゆる「不労所得」を可能にする「資産」的な意味で用いられていて、それが相続されることによって、格差拡大を助長する（ひいては民主主義をゆがめる）という議論である。対症療法として、さらなる資産課税やグローバルな金融資本に対する課税などが提起されており、この「21世紀の社会民主主義」（とタイトル変更したほうがわかりやすい）は、ジェイムソンが『資本論』について述べたのとは異なった意味で、文字通り、「労働」について全く語っていないのである。

結果として『21世紀の資本』を通してよりも、「19世紀の資本」すなわち『資本論』を通じてのほうが、資本主義の全体像とリアリティを感知し得るし、『資本論読解』の序論に立ち戻ってみると、ジェイムソンが次のように言っていることは、もっともであると思われる。

資本主義は、そのいずれの段階においても、要素と構造（利潤動機、蓄積、拡大、賃労働の搾取）に関しては後の段階との同一性を維持するけれども、それと同時に文化と日常生活、また社会組織と人間関係においては変異を示すのである。今日、『資本論』についての創造的読解は、一つの翻訳のプロセスであるほかない。このプロセスによって、ビクトリア朝の時代、工業製

の初期の段階のために発明された言語と概念とが「原曲」構造に忠実なままコード変換を施される。原曲の表象のもっていた野心的な部分と構造的な複雑性を保持することによって、現代的な表象性を確保することができるのだ(6頁/p.9.)

冒頭でも触れたように、ジェイムソンはかつて「ポストモダン」批評の重鎮として、まさにこの引用部分でいう「変異を示す」文化の諸問題、「上部構造」の諸問題について縦横無尽に論じていた。しかし、そのことは、古い資本主義的な生産様式や資本のメカニズムが根本的に変わってしまったとか、なくなってしまったことを何ら意味しなかった。逆にそのことが見えにくくなってしまった歴史意識なき歴史段階としての「ポストモダン」の深層構造の解明に多大な労力を費やしていたのがジェイムソンであった。その彼が、比較的近年になって改めて『資本論』に取り組んだことは、感慨深い。とはいえ、それにとどまるのみならず、以下の『アメリカン・ユートピア』という(ジェイムソンを知る者にとっては)やや意外なタイトルの論考は、政治的により挑発的であり、ただしこれも、賛否を別にすると、彼による物事の「異化」ぶりの本領発揮とも言える。

9. 『資本論読解』が、全体としての資本主義システムの弁証法的な把握、表象可能性/不可能性に重きが置かれていたとするならば、『アメリカン・ユートピア：二重権力と国民皆兵』*American Utopia: Dual Power and Universal Army*は、ジェイムソンが社会主義的プログラムについて明けすけに語っている点で興味深い。ただし仮に読者が北米の政治理論や哲学に馴染みがあったとしても、内容は馴染みやすいものではなく、それは過度に難解だからということではなくて(難解さはむしろ鳴りを潜めている)、そもそも副題となっている「二重権力」はレーニンの造語だし、ジェイムソンが本論文で、最も長く引用しているのが、ジェファーソンやマディソンではなくて、トロツキーの『テロリズムと共産主義』からである(田尻芳樹氏の抄訳では144-146頁/pp.32-34)。ここでジェイ

ムソンは、国民皆兵 *universal army* の復活を提唱しており、左派の間ではなおさらこれを奇異に感じるか、抵抗感をもつ者が少なくないだろう。グローバル資本主義はもとよりアメリカ社会の現況に絶望しているジェイムソンが、今や『アメリカン・ユートピア』と題して破れかぶれの議論をしているのではないかと訝しがる者もいるかもしれないが、ジェイムソンは、いつもながら、きわめて真摯で本気<sup>(17)</sup>のようであり、よく読んでみると、米国でも評判の悪い徴兵制を「異化」して、軍国主義を非軍国主義的に「脱構築」して、ユートピア的議論の橋渡しにしようとしているようである。

『アメリカン・ユートピア』では、冒頭で若干の状況整理がなされていて、まず1970年代末から1980年代以降のレーガン・サッチャー主義が勝利した時代をユートピア論の没落と重ね合わされている（アーネスト・カレンバックの1975年の小説『エコトピア』を最後のユートピア論と位置付ける）（128-129頁/ pp.1-3.）。ジェイムソンが「ユートピア」に託す意味はかなり複雑であり、説明を要するが、それは単に矛盾の存在しない理想郷といった意味ではない。ジェイムソンは2005年に『未来の考古学：ユートピアという名の欲望』（邦訳題）という比較的長大な著作を書いていて、詳細をそちらにゆだねるが、そもそも『政治的無意識』（1981年）においても、結論部分で「ユートピアとイデオロギーの弁証法」を提起しており、イデオロギーを単に伝統的マルクス主義的な意味での（歪められた）虚偽意識としてとらえるだけでなくユートピアを触発するような肯定的な解釈学としてもとらえており、種々の文学作品に横たわるユートピアへの欲望を「政治的無意識」と呼んだのであった<sup>(18)</sup>。その後、ポスト冷戦時代においても、ユートピア論の再評価や復活に余念がなく、1920

---

(17) 「アメリカン・ユートピア」の一部の講演は、以下で公開されている。https://www.youtube.com/watch?v=MNVKoX40ZAo

(18) Jameson, *Archaeologies of the Future* の邦訳『未来の考古学：ユートピアという名の欲望①』では、訳者の秦邦生氏が、ジェイムソンのユートピア論の特徴を「訳者あとがき」でまとめている（390-405頁）。

(19) *The Political Unconscious*, pp.281-299.『政治的無意識』514-549頁。

年代のソヴィエトの農村における過酷な現実を描いたプラトーフの長編小説『チェヴェングール』においてさえ、ジェイムソンはそこにユートピアの衝動をかき取っている（「ユートピア・モダニズム・死」<sup>(20)</sup>）。

ジェイムソンは、資本主義から抜け出す第三の道として「二重権力」というプログラムを提唱するのだが、それはジェイムソン自身のユートピア的提案を生み出すものであるという。「二重権力」は、元々1917年のロマノフ王朝崩壊後のロシアで、いわゆるブルジョア臨時政府と労働者・兵士ソヴィエトが共存・競合していた状況を指していた（例えば軍将校は臨時政府の指揮に従い、末端の兵士達はソヴィエトの決定に従っているなど）。ジェイムソンは、「二重権力」が他の多くの形態でも存在してきたのであり、古くからは教会と国家の二重性、フランス革命時代の地方のコミューンの役割、また現代ではブラック・パンサーやハマスが、公式政府が十分に実施できない、日常サービスを提供したことにもみられ、その中で、いつ革命的暴力が現れるかは、文脈によって異なるという。ただし、中央政府の統治が及ばないように少数民族や先住民などの自由地帯や飛び地は、「国家内国家」であり、「二重権力」とは呼ばず、アラブの春やウォール街占拠（オキュパイ運動）も、情報テクノロジーを駆使した空間的出来事であり、「二重権力」とは言えないとする。

この「二重権力」論に先立って、ジェイムソンは『資本論読解』でも批判されていた社会民主主義、具体的には、米民主党や欧州の社会民主主義政党について、その現状からは何も期待できないとしつつも、にもかかわらずこれら

---

(20) フレドリック・ジェイムソン（松浦俊輔・小野木明恵訳）『時間の種子：ポストモダンと冷戦以後のユートピア』（青土社、1998年）102-170頁。ここでジェイムソンはポスト冷戦時代に幕開けに際して、すでに次のように言っていた。「社会主義体制や財産制度がソ連共産圏のいたるところで覆された今こそ、（中略）純粋な社会主義文化といったもの、つまり、社会主義の性格や教育学の産物にもとづいた社会主義文学の存在が、今後さらに認識されなければならないと思われる。我々は、非市場、非消費者-非消費社会で形成された人間が、我々と同じような考え方をしないということを、これから発見していきましょうし、実際のところ、すでにそうしつつある。」（102頁）

の古い社会民主主義的、リベラル政党が、もし機能を持つかもしれないのであれば、金融や銀行、保険業務の国営化にはじまり、公教育と医療の無償化にいたるまで「現在の代議制システムの下で、政党はどれも達成できないが、これらについて語り、これらを再び思考可能にし、種子をまくことで未来の実践を想像する可能性を再燃させることができる」場合としている(133頁/p.8.)。つまり無力な社会民主主義・リベラル政党が再びポテンシャルを有するのは、みずからをグローバル資本主義に適合させることによってではなく「社会主義を語る」ことによってであり、そのためには、ジェイムソンは「大きな政府」や(多くの人に嫌悪感を与える)官僚制の復権さえをも厭わない(かつて公務員にも自己献身的、利他的情熱に支えられた事業があったことにも注意を向ける)(132頁/p.7.)。

10. 以上のような巨大な変化の実現の媒体となりうるのが「二重権力」という位置づけである。公式的な権力(国家、政府)とインフォーマルな権力との共存、競合をユートピア的議論の橋渡しにすることは、何らかの立憲的モデルの構築に向かう政治理論からするとナンセンスに思われるかもしれないが、冒頭でも触れたように「ポストモダン」の診断者でもあるジェイムソンは、以下のような時代状況について語る。

(シアトルや東欧、タヒール広場やウイスコンシン、オキュパイ運動で新しい民衆デモは)友人のマイケル・ハートやトニ・ネグリが「マルチチュード」と呼ぶ人々の出現を実際に示した。これらはもはや継続的な政治politics of durationではなくて今、現在の政治politics of the instant, the presentであり、ネグリ自身が、構成された権力constituted powerに対立する構成的権力constituent powerと呼んだものである。一般にポストモダニティとは、この種の新しい現在性、身体への還元によって特徴づけられる。このように遍在する空間と、進行形の今現在との新しい弁証法においては、歴史や歴史性、歴史感覚は敗者である。過去は過ぎ去り、我々はもはや未来



を想像できない。我々は異なった文脈で空間に戻るだろう。しかしこのような歴史、歴史性や歴史意識の消滅は、何らかのひじょうにリアルな政治的問題に直面したり、とりわけ新しい方法で革命を考える責務に直面した際に、ラディカルな体系的变化になおコミットすることに、我々を直面させる。そうした新しい方法が、ここでいう二重権力の概念なのである (p.13.)。

ジェイムソンは、「二重権力」の媒体となる様々な「中間団体」についての検討に入るが、労働組合、(コミュニティに根差した) 郵便局、法律専門職、医師会、教会などの団体、集団に期待を寄せているわけではなく、むしろ情報テクノロジーの発達の中でのそれらの没落、地域的コミュニティ内部での役割の衰退を見て取っている。しかし「真に革命的な仕方では機能しうるシステムが唯一残されている」とし、それが軍隊なのである (135頁/p.19.)。これは説明を要すると思われるが、この問題提起は、まず医療国営化の問題と関係しており、ジェイムソンはアイゼンハワー大統領の「医療国営化が必要なら、私がしたように軍隊に入りさえすればいいのさ」という、一見時代錯誤的な言明を想起させる (同大統領は元々陸軍参謀総長であったことで知られている) (同上/Ibid.)。

軍の問題と医療の問題 (ましてやここでいう医療国営化) との結びつきは、多くの日本人にはピンとこないが、米国にはVA hospitalいわゆる在郷軍人病院という「国営」の病院があり、サービスや質、財源の点で多くの問題を抱えてきており (裕福な退役軍人などは他の私立の病院に行く)、ジェイムソンも「悲しむべき状況と嘆かわしい資金不足」を指摘している。ただ、そうした状況は「すべてを抱き込む後期資本主義システムの内部にある社会主義的、さらには公的な飛び地の運命のもう一つの例証」だとし、他方でキューバの医療をも評価している (135-136頁/pp.19-20.)。

ここでジェイムソンが、ニクソン時代に (ベトナム反戦運動の学生の抵抗によって) 廃止された徴兵制度について、とりわけ国民皆兵 universal army という視点から、その復活を提唱するのは、いくつかの文脈からである。まず



レーガン＝サッチャー時代に始まった自由市場的私有化の波が軍にも押し寄せ、ラムズフェルド（国防長官）時代には軍の機能の多くが民間軍事会社に外注され、それは単に資本主義らしいビジネスのやり方を翻案したというのみならず、「ウェーバーの言う暴力の独占をするこの小さな職業集団を民主的大衆運動のいかなる可能性からも切り離し、警察力の構造へとさらにそれを同化した」（140-141頁/ pp.27-28.）。そこで、ジェイムソンは、ユートピア的提案の最初ステップとして、種々の産業の国営化のための社会主義的可能性の線に沿って、軍隊を「再国営化」renationalizationすることを提唱する（141頁/ p.28.）。

現在の軍事力を、ますます非代表的になっている『代表制政府』とうまく共存できるあの一般大衆の力に、代表制的なものでなく大衆的民主制の媒体に、変えるために、徴兵制the draftを再導入するのである。（同上/ Ibid.）

こうした、にわかに承服しがたい大胆な提案は、例えば日本で徴兵制の復活という、ほぼ間違いなく戦前の軍国主義の亡霊と観念されるのとは、だいぶ様相を異にするだろう（ジェイムソンの「アメリカン・ユートピア」に際して柄谷行人が寄せた論考「ジャパニーズ・ユートピア」は憲法9条の無条件実施に他ならない）。

ジェイムソンによれば、新しい国民皆兵制度の下では、病院はすべて国営化され、万人に開かれた無料の国営医療サービスとなり、同時に国民皆保険制が、医薬品の生産や新薬の開発とともに、軍を中心に再編成されるという（141-142頁/ p.29.）。なるほど、これは「オバマケア」とそれへの抵抗で揺れてきた米国社会では「ユートピア」である。また新しい国民皆兵制度は、狭義の軍事機能というよりは、教育、衣料品の製造、映画製作、自動車の生産、そして食糧生産と供給の任務に就くという（142頁/ p.29.）。このようにジェイムソンが、国民皆兵制度の復活を唱えるのは、米国がかつてそうしたように、アフガニスタンやイラクで戦争をするためではなく、非軍国主義的な動機からである。そ

もそも国民皆兵が復活したら、外国で戦争などできなくなるという（141頁/p.28.<sup>(21)</sup>）。マルクスのいう資本の有機的構成の高度化は、ジェイムソンが指摘するように、軍の私有化にもあてはまり、軍事技術の高度化、ハイテク化、情報化は兵力、軍人の労働力をいっそう削減させ、世論も政権も、あり得べく対外戦争に際して決して徴兵制の復活などを望んでいないことを織り込んでのことだろう。こうした現実主義的な安全保障政策とは逆の方向を行くジェイムソンの「軍事的民主制」のユートピア指向の議論は、現下の安保政策、軍事機能に対する根底的批判が込められているとみることもできるだろう。そもそも、ジェイムソンがあえて出しているマルクス主義の「土台と上部構造」の図式によれば、国民皆兵の提唱は、単に軍という国家の暴力装置としての「上部構造」の制度をいじるのではなく、社会の生産関係という「土台」を変えてしまうところに主眼が置かれている（pp.43-44, 84-85）。

現代では、多くの人が、軍事機能あるいは軍の存在を、絶対平和のようなユートピアと対比させて、国土を蹂躪された場合などに備える（あるいは「集団的自衛」のような）安全保障策として、近隣国からの現実的な脅威に直面している場合はなおさらのこと、現実主義的な必要悪としてとらえている（実際には米国がそうであるように巨大な軍産複合体や対外的な資本投入の利害がからんでいるのだが）。ところが、ジェイムソンの議論の特徴は、国民皆兵の復活が、現実主義的な安全保障政策や資本の利益としてではなく、ユートピア論への橋渡しになっていることである。これは、兵士達が滅私奉公し、いざとなれば国のために命をささげるという軍国主義的な妄想とは異なって、一定の生産および

---

(21) これに関連してジェイムソンは次のようにいう。「まず第一に、資格のある招集兵の総数は、16歳から50歳まで、あるいはお望みなら60歳までの全員——つまり事実上全人口——を含めることにより増加するだろう。そのような管理しようのない多人数は、それ以降、外国での戦争はできないだろうし、まして、クーデタを成功させることなどできないだろう。この過程の包括性を強調するために、障害者も全員がこのシステムに適切な場所を与えられ、平和主義者と良心的徴役忌避者は武器の管理の開発や保管などを任せられるようになる、と付け加えよう。」（141頁/p.28.）

生活保障機能をもつ軍が、米国の文脈でいえば連邦を構成する個々の州の単位を超えてネットワーク型の権力を有し、「二重権力」の一端を担い始めるということである(149頁/p.39.)。この連邦制については、ジェイムソンは、かつて近代では軍隊は、国語すら話せない地域の住民からもなる国民を創りあげる使命を持っており、今日、それはメディアの役割に代わったにせよ、軍隊は、州の境界を超える事実上唯一の制度であるとし、次のように言う。

(州の)境界区分は、合衆国憲法自体に埋め込まれた最も重要な反革命的な原則であり、そもそも合衆国憲法がこれまで考案された反革命システムのうち最も成功したものの一つである。なぜなら憲法の廃止なしにはいかなる真のシステム変革もこの国では起き得ないからである。すでに主張したように憲法は、国家創設の基礎となるフェティッシュであり、基本的人権保障条項がもたらすさまざまな保護のせいで、左翼も右翼同様失うのを嫌がるだろう文書である。システムとしての軍隊の目立った利点は、それが憲法を捨てることなく超越すること、また、それが異なる空間レベルで憲法と共存し、それによって二重権力樹立のための並はずれた道具になる潜在性を持つことである(140頁/p.27.)。

米国連邦制における州の境界は、ジェイムソンによって「反革命的」構成物の最たるものと名指しされているが、それを(憲法を廃棄せずに)乗り越える可能性をもっている唯一の制度が軍だというのは、ユニークである。またジェイムソンは、ソヴィエト労農赤軍の創設者のトロツキーからインスピレーションを受けて、軍隊を社会の縮図としているが、社会の「軍事化」とは、「戦争でも武装化でもなく、軍事教練ですらなく、むしろ社会の存在に必要な機能が徴兵制のようなものによって確実に確保されるための規律である」(146頁/p.35.)。もはやここでは軍というのは、「軍事機能」を果たすというよりは、ひとつの巨大な生産拠点、生産ネットワークである。ここには、ひょっとすると米国では、社会に必要な基本的なインフラも十分に調達できない(医療、教育、

食糧等) という苦々しい現実が目の前にあるのかもしれない。先述の通り、先進国の知の状況を示す「ポストモダン」批評で名をはせたジェイムソンであったが、今や彼は、第三世界の島を点在させ、場合によって基本的な生活手段に事欠く先進国の米国において、社会の「軍事化」=国民皆兵を通じて軍の生産拠点化を唱えているのであり、それはリベラル知識人や左派知識人にとってタブーであった。

11. ジェイムソンは、『資本論』をグローバルな失業という今日的視点から読解していたが、「国民皆兵」はこの失業を止揚してしまうだろうし、現にジェイムソンは、所得保障と教育のためのサバティカルなどについて言及している。また、ジェイムソンのユートピア論の特徴としては、「社会主義」はもとより、国営化(国有化)、官僚制、徴兵制、国民皆兵など、現代の自由と民主主義の愛好者であれば、ほぼ間違いなく嫌悪感あるいは戸惑いを覚える概念を「異化」してユートピアの媒介にしていることが挙げられる。裏返していえば、ジェイムソンにとっては、現代の自由、民主主義、そこから派生する諸概念は、資本主義的な生産関係の浸食を受けた物象的概念であり(むしろ資本主義の表象は概念自体から姿を消している)、希望というよりは絶望感をもよおす概念であり、ジェイムソンは何の留保もなしに、それらの概念に依拠することはない。彼が「政治理論ではなくユートピア論を」と繰り返し唱えているのも、そうした事情に根差しているのだろう。

「二重権力」に関して言うと、1917年のロシアでは、ソヴィエト側が(もはや機能していなかった)臨時政府を武装蜂起で倒すという権力奪取で幕を閉じたが、ジェイムソンは、「いつ革命的暴力が現れるかは、文脈によって異なる」というにとどめ、権力奪取の政治について語っているわけではない。にもかかわらず、ジェイムソンが、(何らかの構成された権力に向かう)一般の政治理論と対比させて、「二重権力」論をユートピア論の橋渡しにしようとしたのは、『資本論読解』でも示したように「ロスト・ポピュレーション」を増産するグローバル資本主義に対抗圏を作る意味においてであろう。ただ、その「二

重権力」の担い手として現実味があるのが軍（国民皆兵）であるという展望を示したことが、基本的に平和と反戦指向である左派の間でも戸惑いやショックをもたらした。むろん、ジェイムソンのいう国民皆兵は、今日のハイテク化された軍事機能からはかけ離れたのものであり、あえて時代錯誤的な提唱をしたのだろうが、それでも国民皆兵——もしそれを実証的に検証するのであればスイスだとかイスラエル、もしくは旧ユーゴスラヴィアなどの例、そこでの良心的懲役忌避はどうなっているのか、等々をみななければならないが——という発想は、左派の間でも定着しているリベラルな個人主義的感性を逆なでするのに十分であっただろう。これは、ジェイムソンのユートピア論が、何らかの集団的経験に根差した階級のない共同社会を指向するものであることに関わってくる。

ひるがえって日本では憲法9条の下に自衛隊が存在しているが、仮に自衛隊の国民皆兵化に類する主張があるとするれば、それは「二重権力」のような視点からではなくて、ほぼ間違いなく「権力」と同化した視点からであろう。